自分に出来ることをする

ルカ2：36～38

ひと昔前の、日本女子バレーボール代表の一人に、竹下という選手がいました。背が高いことが圧倒的に有利なこのスポーツの世界。海外には190㎝の選手がざらにいて、200㎝を超える選手もいる中で、彼女の背丈は僅か159㎝でした。それでも彼女は長い間、セッターという重要な役割を果たしました。セッターとは、攻撃の得意なアタアッカーと言われる選手たちに、最適のトスを上げる働きをするものです。最も、敵味方両方の全体の動きを知って咄嗟の判断をし、的確な動きと指示をしなければならないポジションです。日本の女性としても、ごく普通の背丈しかない彼女は、背丈が低いことで多くの日本の関係者から酷いバッシングを受け、幾度もくじけそうになりながらも、大変な努力を重ねました。確か、ある年には、世界女子バレーの中で、最優秀選手に選ばれてたこともあると記憶しています。使い古された言葉ですが、まさに、小さな巨人でした。日本人女子バレーには、彼女の他にも、同じように背が低くても見事なプレーを続けた人たちがいました。特に、リベロとして活躍した人たちに多く、中でも、佐藤選手は現役当時 153cm しかありませんでした。

欠点を長所に変え、チームの中でそれを活かす見事な姿には、感動したものです。これは一般世界でもあり得ることですが、キリストの御体である教会の中では、特に大切なことです。ともすれば短所、欠点、弱みと受け取られるものを、かえって長所、利点、強みとされていくのが教会です。もちろん一般世界でもそれは言えるのですが、教会の中ではそのことを特に意識して、全体の益にしていくのです。コリント第一の手紙、12 章を読むと、それがとても強調されているのに気づきます。教会の中では、弱いところ、醜いところの働きの重要性が認められて、大切にされるのです。そうなるように、教会全体が努力をするのです。弱さや醜さが逆に生かされる共同体が、キリストの御体と呼ばれる教会なのです。教会が強い者の場、秀でた者の場、出来る者の場、美しい者の場になってはなりません。

大衆受けを狙い、大きな教会になろうとし、豊かな教会を目指すと、どうしても本来の教会の在るべき姿から遠ざかり、一般の世界、競争の激しいビジネスの世界と、歩調を合わせ、妥協をする教会になってしまいます。大きな教会が悪い教会なのではありません。大きくなることを、優先順位の初めの方の置くことが、悪いのです。初代の教会も、どんどん大きくなりました。しかし彼らは、大きくなることを目指して、大きくなったのではありません。教会の本来の姿を追求している中で、結果として大きくなったにすぎません。そこには、当時の社会的要因も、教会の活動の在り方もかかわっていて、現在の日本で臨めることではありません。私たちに求められているのは、小さな者が大切にされ、弱い者の存在が大きく認められる教会の姿です。その教会の在り方を求めるために、一般社会の競争意識を持ち込む教会より、成長が遅く、いつまでも小さな教会でいなければならないのなら、そのように致しましょう。でも、その中でも、自分たちに託された福音の宣教の働、キリストの証人としての働きを、立派に果たしていきましょう。

昔、イエス様が生まれた頃のエルサレムの神殿には、アンナという老婆がいて、昼も夜も断食と祈りを持って、神様にお仕えしていました。彼女には、若いころの活発さはもうありませんでした。人目を惹く美しさもなくなっていました。社会の中で、もう目立つ働きはできなくなっていたのです。しかし彼女は、それに落胆

も失望もしなかったようです。かえって、自分にできる働きをもって、神様にお仕えしていたのです。そこが重要です。もう説教をするにも活舌が失われ、記憶が薄くなり、話の組み立ても、昔のようにはできなくなった牧師たちも多くなりました。教会のなかで活発に奉仕をしていた女性が、年を重ね、動き回ることが出来なくなったという話も良き聴きます。以前は、美声をもって歌い、多くの信徒たちの喜びとなり、励ましともなっていたのに、もうその声が出なくなっていしまったという人もいます。でもそのような人たちにも、まだまだ大切な奉仕ができるのです。他の人のために祈る、教会の働のために祈る。神の栄光を称えて祈ることが出来るのです。

　昔、まだまだ日本のトイレが不潔だったこのことです。知能指数が低く、普通の働きが出来ないために、社会では爪はじきにされていた男性がいました。でも彼は、単純な仕事ならば、不平も言わず、もくもくと働き続けることが出来ました。まだ 10 代だったころから 50 近くなるまで、教会では、嬉々として掃除に励んでいました。信徒たちの多くが、彼の姿を優しく見守り、励まし続けていました。そのような中で、「教会のトイレがとってもきれいで感動しました」という、新来者の声が多くなったのです。「トイレを借りるために教会に来て、そのまま居続けてしまいました」と話す女性信徒も現れました。彼の姿に打たれて、仕える者の大切さを学んだという、若い信徒たちも何人もいました。牧師は講壇から立派な説教をしていましたが、牧師の説教より力があったのが、この人の無言の説教だったのです。

　どこかの大会社の社長さんが、身分を隠して自分の会社のトイレ掃除を続けていたという、感動的な話はいくつかありました。そこにはそうする理由があったことでしょう。謙遜になることも大切だったでしょう。会社の重役会議では絶対に聞こえてこない話が、トイレでは聞こえてきたことでしょう。それも大切です。でも、それぞれの人間の能力、力が正当に発揮され、正しく評価される社会が大切なのです。

　私たちは自分の能力を過大評価したり、過小評価したりしないようにしたいものです。背伸びはしない。しかし、ちぢこまってもいない生き方です。そして他の人を見下さず、大きな人の前に出ても怖気憑かず、その人がいてくれることに感謝ができる者に、なりたいと思います。

特に、キリストの御体である教会では、そのようなことを大切にしたいものです。